

前回は、ミツが修道女でさえむずかしい「愛徳の実践」を患者さんたちに行えたのは、イエスの言う〈幼児〉のような女性だったからであり、私たちがミツのような生き方をしようとすると、そこに立ちふさがる〈理想〉と〈現実〉の大きな落差がある…ということを書きました。

きょうは、ミツが「神」の存在を受け入れなかった理由をみていきます。また、ミツがその人生において最期まで持ち続けた〈大切なもの〉とは何だったのかを考えてみましょう。それはきっと、私たちにとって大きな、そして大切な問いでもあるはずです。

### 『手の首のアザ』(五) (p.216~235)

『だれよりも幼児のようになることを命じられた』神。だからこそ『神はいつそう愛し給うのではないか』とスール・山形が書くミツでしたが、彼女は神については『決して首を縦にふりませんでした』。そのわけは、ただ一点にありました。

病院には4人の幼い子どもたちがいました。ミツは病院からもらうわずかな手当から、子どもたちに何かを買ってやるほど子ども好きでした。そのうちの一人、壮ちゃんという6歳の子が肺炎になりました。ペニシリン・ショックを受けやすい子だったので、特効薬もつかえず、絶望的な状態におちいりました。ミツは3日間、寝ずの看病をしました。氷枕の氷で、しもやけができたミツの手は青紫にふくれあがるほどでした。

『あたしね、… 壮ちゃんを助けてくれるなら、そのかわり、あたしが病気になってもいいと祈ったわ。』、『もし、神さまってあるなら… 本当にこの願いをきいてくれないかなあ』。

しかし、ミツの願いもむなしく5日後、子どもは息を引き取りました。

『あたし、神さまなど、あると、思わない。そんなもん、あるもんですか』。『あなたの願いを、神が、きいてくれなかったから？』と問うスール・山形にミツは答えます。

『そうじゃないの。(中略) あたしは、神さまがなぜ壮ちゃんみたいな小さな子供まで苦しませるのか、わかんないもん。子供たちをいじめるのは、いけないことだもん』。

『なぜ、悪いこともしない人に、こんな苦しみがあるの。病院の患者さんたち、みんないい人なのに』。

ミツが神を否定するのは、〈苦しみの意味〉という点にかかっていたのです。

### 《主も同じ苦しみを分かちあってくれている！》

スール・山形はこの問いに次のように答えます。

『どう説明したらよいのでしょうか。人間が苦しんでいる時に、主もまた、同じ苦痛をわかちあってくれているというのが、私たちの信仰でございます。どんな苦しみも、あの孤独の絶望にまさるものはございません。自分一人だけが苦しんでいるという気持ほど、希望のないものはございません。しかし、人間はたとえ砂漠の中で一人ぼっちの時でも、一人だけで苦しんでいるのではないのです。私たちの苦しみは、必ず他の人々の苦しみにつながっている筈です』。

〈人間が苦しんでいる時に、主もまた、同じ苦痛をわかちあってくれている〉— キリスト教信仰の根本的な教理のひとつです。

主（イエス）が私たちといつも一緒にいてくださるといふ一つの詩をご紹介します。

（句読点は、読みやすいように筆者がつけました。ご了承ください。）

## 『あしあと』 マーガレット フィッシュバック パワーズ

わたしは夢の中で見た。主と共に海辺を歩む自分と、空の銀幕に映る過ぎ去ったわたしの生涯のすべての日々とを。

なんと砂の上には、毎日の歩みをしるす ふたりのあしあとが並んで残っているではないか。ひとりのはわたしの。もうひよりは 主の。

しかし、ところによっては ひとり分のあしあとしか見あたらない。それはよりによって、わたしの人生で最も困難でつらく 耐えがたかった日々にあたっている。

そこで わたしは主に不服を言った。「主よ。わたしはあなたと共に生きることを選び、あなたはいつもわたしと共にいると 約束してくださいましたね。それなのに、なぜわたしを独り 置き去りにされたのですか。それも わたしが最もつらかった日々！」

すると 主はお答えになった。「わが子よ、 わたしがあなたを愛していることを あなたはよく知っているはずだ。わたしは一度も あなたを見捨てたことはない。」 「ひとり分のあしあとしか残っていないところは、まさに あなたを腕に抱きあげ、わたしが運んであげた日々だったのだよ。」

「人生は山あり、谷あり。」と、よく言われます。順風満帆なときもあります。しかし、何をやってもうまくいかない、どんなに努力しても自分の望むことが叶えられない。あるいは、予期しなかった病に苦しめられる … という時期も、あなたのこれまでの人生にあったのではないのでしょうか。そんな時、ただ一緒に寄り添って歩いてくれるだけでなく、もっとも辛い時に、わたしを「腕に抱きあげ、運んで」くれる存在がいる —。「私ひとりではない」ということが、どれほど大きな生きる支えになることでしょうか！

### 「さいなら、吉岡さん。」

哀しいという言葉では到底言い表せない現実を、私たちは受け入れなければなりません。スール・山形の手紙は私たちに、言葉も出ないほどの出来事を伝えます …。

12月、クリスマスを間近に控えた日。患者さんたちの作業でできた鶏卵と刺繍を御殿場の店に納めて現金に換え、彼らのお小遣いにするため、ミツは三輪トラックに同乗し、御殿場へ出発しました。それから約2時間半経った午後5時半過ぎ、病院に1本の電話がかかってきました。ミツの名を告げ、交通事故に遭い救急病院に収容された … という内容でした。スール・山形が病院に駆けつけると、ミツはすでに昏睡状態でした。一緒に行った島田さんの話によると、ミツが鶏卵の箱を抱えて駅前の広場を渡ろうとした

時、トラックがバックしてきてミツは横向きにねじり倒されたとのこと。

『「卵、卵。」 意識がなくなるまで、2分ほどの間、ミッチャンは卵のことばかり言っていた』といます。『患者さんが、不自由な体と神経のきかない手で飼った鶏の卵は、広場の真中に砕かれ、散乱し、黄色く地面に流れ』、『ミッチャンは、その卵の黄身の中に、うつ伏せに倒れたのでした』。

昏睡は4時間ほど続きましたが、午後10時20分、ミツは息を引き取りました。その前に、スール・山形は御殿場の教会に電話して神父に来ていただき、ミツに洗礼を授けてもらいました。

『昏睡している間に、ミッチャンは一度だけ叫びました。その言葉を耳にしなかったならば、私はあなたに、このような長い手紙を差し上げなかったと思います。(中略) 昏睡中、ミッチャンは一度だけ目をぼんやりあけました。そして、何かを探すように手を動かしました。』

「さいなら、吉岡さん」

これが、ミッチャンのその時の言葉だったのです。それっきり彼女はもう何も言いませんでした』。

ミツは、患者さんたちが愛情こめて育てた鶏が産んだ卵の黄身の中で、その人生の終幕を迎えたのでした。そして、最期の言葉が「さいなら、吉岡さん」。傍から見れば、もてあそばれ、ごみ屑のように自分を棄てた男の名前をつぶやいたのです。でも、ミツにとっては人生で出会った〈いちばん大切な人〉だったのです。吉岡との出会いは、ミツにとって人生の中でいちばん大きくて、いちばん大切な、そしてたった1度の忘れられない出来事だったのです。

誤診後、元の生活に戻れば吉岡に再び会えるチャンスもあったのに、世間から隔離され、苦悩と孤独の中に生きる患者さんたちとの生活を選んだミツ。そして、修道女の言葉を借りれば、『ミッチャンはその苦しみの連帯を、自分の人生で知らずに実践していたのです』。

スール・山形は続けます。

『… あれ以来、幾度も考えたことをもう一度、心の中で噛みしめました。もし神が私に一番、好きな人間はときかれたなら、私は、即座にこう答えるでしょう。ミッチャンのような人と。もし神が私に、どういう人間になりたいかと言われれば、私は即座に答えるでしょう。ミッチャンのような人と。… 』。

私たちはミツの人生を見つめることにより、それをどう受け止め、自分はこれからどう生きていけばいいのか — という問いの前に立たされるのではないのでしょうか。

次号まで。

【引用・参考にした書籍】 ・遠藤周作 『わたしが・棄てた・女』

・マーガレット フィッシュバック パワーズ (ティッツィアーノ・ダニオッティ編、石川康輔・訳) 『あしあと』 (ドン・ボスコ社、2003)